

*Mrs. Dalloway*と*The Heart of the Matter*
における自殺観の比較

島 居 佳 江

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第五十九号抜刷

2023（令和5）年3月

Mrs. DallowayとThe Heart of the Matter における自殺観の比較

島 居 佳 江

1. はじめに

日本は自殺大国である。厚生労働省「自殺の現状」によると、15～39歳各世代における死因の第1位は自殺で、先進国(G7)中で、唯一日本だけの現象である。翻ってイギリスでは、45歳から64歳の男性の自殺割合が一番高い(Office for National Statistics)。The Heart of the Matterの主人公Scobieもこの範疇に属するし、Mrs. Dallowayで自殺するSeptimusは30歳で若干若い男性である。本論では、The Heart of the MatterのScobieとMrs. DallowayのSeptimusの自殺を、現世の捉え方、死後のイメージ、そして宗教観から比較、対照する。

Mrs. Dallowayの作者であるVirginia Woolf(1882-1941)とThe Heart of the MatterのGraham Greene(1904-1991)は、ほぼ同時代を生きた。この時代、戦争や植民地支配がイギリスの社会情勢に大きく影響を与えた。ウルフは1922年10月14日の日記に『ダロウェイ夫人』で、狂気と自殺の研究の輪郭を描く旨ほか「セプティマス・スミス、良い名前ではないだろうか」(Letters I: 207)などと記している。セプティマスは、第一次世界大戦に自ら進んで従軍し功績をあげるが帰還した後、戦争神経症を患う。スコビーの住むアフリカの植民地では灯火管制が敷かれており、人々の生活にも戦争が暗い影を落としている。また、Mrs. Dallowayの友人Peterは「相当な家柄の在印イギリス家庭」に生まれ育った。1877年にヴィクトリア叙法により、インド皇帝を称したイギリス女王だったが、1947年にインド・パキスタンが独立した。ウルフの文化研究的アプローチの代表的研究者である

Zwerdling が、ウルフが生きた時代の社会や文化に置いて、ウルフの文学がどのような意味を持つのかを考察している。本研究では文化研究を踏まえた上で、宗教観に光を当てる。二人の作家は図らずも、無神論者とカトリック信者である。対照的な信念を持った二人が結果として同じ自殺を描いた背景を考察したい。

2. 現世の捉え方

セプティマスは、この世界とつながっているように感じると同時に自殺願望がある。「葉は生きている、木々は生きている。そして葉は何百万もの繊維によってベンチに腰かけているこのぼくの体とつながっている」(24) と話すセプティマスは第一次世界大戦から復員後、シェルショックを患い、しばしば妻である Rezia にも、共に死のうと誘う。

He would argue with her about killing themselves; and explain how wicked people were; how he could see them making up lies as they passed in the street. He knew all their thoughts, he said; he knew everything. He knew the meaning of the world, he said. (73)

上の引用のようにセプティマスが見るこの世界は、邪悪なもので満ちており、彼は世界の意味がわかると豪語する。セプティマスは「こんな世界に子どもを送り出すなんてできない。苦悩を永遠に続けていくなんて」(98) と今を生きる世界に絶望感を募らせ、子作りを拒否する。Evans は戦争で死んだセプティマスの上官である。友情以上の気持ちを持っていた相手が「イタリアで戦死したとき、セプティマスはまったく動揺の色を見せず、これで友情が終わったと落ち込むこともなく、ほとんどなにも感じなくて、平静でいられる自分を喜んだ」(94-5)。しかしながらその後、彼は「何も感じられない」ことに恐怖を覚え、苦しみ続ける。

一方スコビーはカトリック教徒で、「自分の人生がどんな意味において

も重要であるなどとは思ひもしない」。

It was a formality, not because he felt himself free from serious sin but because it had never occurred to him that his life was important enough one way or another. He didn't drink, he didn't fornicate, he didn't lie, but he never regarded this absence of sin as virtue. (103)

スコビーは物語の前半、告解に値するような罪は犯していないと考えている。形式的に祈りを唱え、「酒も飲まず、姦通も行わず、嘘さえつかない」。お決まりの習慣を単調に繰り返していた生活の歯車が、妻 Louise の願いを叶えることをきっかけに少しずつ狂ってくる。ルイズは共に暮らす西アフリカ植民地での生活に我慢ができないと、スコビーを責め立てる。自らの破滅を予感しながらも、スコビーはルイズを幸せにする責任を果たそうとする。スコビーはルイズを南アフリカへ行かせるために Yusef に借金をし、その為に弱みを握られる。これを皮切りに、スコビーは思ってもみなかった罪を重ねていく。婚姻の秘蹟をおこなったにも拘らず、Helen と不倫関係になり、神を見捨てた。その後その罪の悔い改めをすることなく聖体拝領を行った。そして彼が心をゆるし愛していた少年給士アリ殺害のきっかけをつくり、最終的にカトリック教徒が犯し得る最悪の罪である自殺に至る。

元々セプティマスとスコビーは、人生について明るい展望は持っていなかった。それが、セプティマスは戦争によって急激に、スコビーは思いがけない落とし穴に嵌り、そのまま滑り落ちていく展開である。

3. 死後のイメージ

セプティマスにとって、この世界と死後の世界の境界線は曖昧だ。セプティマスはしばしばエヴァンスの姿を見、声を聞く。

As for the visions, the faces, the voices of the dead, where were they? There was a screen in front of him, with black bulrushes and blue swallows. Where he had once seen mountains, where he had seen faces, where he had seen beauty, there was a screen.

‘Evans!’ he cried. There was no answer. A mouse had squeaked, or a curtain rustled. Those were the voices of the dead. The screen, the coal-scuttle, the sideboard remained to him. Let him then face the screen, the coal-scuttle and the sideboard ... but Rezia burst into the room chattering. (159)

上の引用のように、セプティマスにとって現世と死後の世界はスクリーン一枚に隔てられているかのようだ。レイツィアによって現実に引き戻されるセプティマスは苛立ちを隠さない。

「死は挑戦であり、死はコミュニケーションの試みで、死は抱擁」(202)とダロウェイ夫人は語る。「自分があらゆる場所に存在している感じがする」(167)というダロウェイ夫人の超越的理論に、友人のピーターも同意見である。

Odd affinities she had with people she had never spoken to, some woman in the street, some man behind a counter – even trees, or barns. It ended in a transcendental theory which, with her horror of death, allowed her to believe, or say that she believed (for all her scepticism) , that since our apparitions, the part of us which appears, are so momentary compared with the other, the unseen part of us, which spreads wide, the unseen might survive, be recovered somehow attached to this person or that, or even haunting certain places, after death. Perhaps – perhaps. (167)

「目に見える部分は儂く、目に見えない部分は死後も残り、どのようにか

して人と結びついたり、ある場所にとりついて生き続ける」というダロウェイ夫人の超越的理論は彼女とピーターに限らず、作品全体に通奏低音のように流れている。死後の世界は、この世界とある部分重なっており、自分と他人、そして自分と世界もつながりを持つ。

... about great discoveries; how there is no death.... (Septimus) cried out that he knew the truth! He knew everything! That man, his friend who was killed, Evans, had come, he said. He was singing behind the screen. (153-4)

セプティマスは「真実を知り、死は存在しないこと」を知る。エヴァンスもスクリーンの後ろで歌っている。この超越的理論に同意する人々にとって、死後の世界は、別世界や地獄または天国などではない。

他方、スコビーはカトリック信者であるので地獄を信じている。不倫相手のヘレンに「地獄なんて信じていないいでしょ」と詰め寄られて、スコビーは以下のように答える。

I believe, I tell you. I believe that I'm damned for all eternity - unless a miracle happens. I'm a policeman. I know what I'm saying. What I've done is far worse than murder - that's an act, a blow, a stab, a shot: it's over and done, but I'm carrying my corruption around with me. It's the coating of my stomach. (216)

「自分は永遠に地獄に堕ちたと信じている。姦通の罪を犯しながらも聖体拝領を受けることは、人殺しよりももっと悪い行為だ」とスコビーは言う。Sinclairも“Christian tragedy is not so much haunted by the fear of death as it is haunted by the hope for new life.” (144) と述べるように、神を信じる人は「永遠のいのち」を持っているので、肉体の死は絶望に値しない。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ち

ます」(ヨハネ 6 : 47) ; 「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」(ヨハネ 10 : 28)。「地獄に墮ちる」ことは、その「永遠のいのち」を失うことを意味する。スコビーは、地獄を ‘a permanent sense of loss’ (179) だと理解している。

セプティマスとスコビーの死後のイメージは真逆と言える。セプティマスの死後のイメージは現世と重なっている、故に死に対する恐怖がスコビーのそれとは随分異なる。セプティマスは強引に迫って来る Dr. Holmes に対して、「これを受け取るがいい」と叫んで、窓から飛び降りる。それに対して、スコビーは自殺を「すべてが剥奪される永遠」(245) だと悟り、長い葛藤と計画、覚悟の上で死に至る薬をのむ。

4. それぞれの宗教観

ウルフは無神論者だった。彼女の姉へ宛てた手紙に、T. S. Eliot がアングロ・カトリックに入信したことに対する憤りが残されている (*Letters* III : 457-8)。彼女の分身であるダロウェイ夫人にも「わたしは一瞬たりとも神を信じない」(31) と発言させる。先に挙げた超越的理論もそうだが、彼女は「善のために善を行うという無神論者の宗教」(85) を持ち、神に対して挑戦的態度をとる。

be as decent as we possibly can. Those ruffians, the Gods, shan't have it all their own way – her notion being that the Gods, who never lost a chance of hurting, thwarting and spoiling human lives, were seriously put out if, all the same, you behaved like a lady. (85)

ダロウェイ夫人は、神々を「悪漢」と呼び、神々は「われわれの人生を傷つけ、妨害し、台無しにする」と語り、「淑女のように振る舞うことによって、神を面食らわせることができる」と考えている。また、神や信仰と密接に結

びつく Miss Kilman は貪欲で僻みっぽく、醜い容姿に描かれる。神の意志を盾に自分を睨みつけるキルマンを見てダロウェイ夫人は衝撃を受ける。

Clarissa (Mrs. Dalloway) was really shocked. This a Christian – this woman! This woman had taken her daughter from her! She in touch with invisible presences! Heavy, ugly, commonplace, without kindness or grace, she know the meaning of life! (137)

このようにキルマンはキリスト教徒を代表し、ダロウェイ夫人の憎悪をかき立て、ダロウェイ夫人は「愛と宗教は魂の独立を破壊する」(139)と結論づける。

Love and religion! thought Clarissa, going back into the drawing-room, tingling all over. How detestable, how detestable they are! For now that the body of Miss Kilman was not before her, it overwhelmed her – the idea. The cruellest things in the world, she thought, seeing them clumsy, hot, domineering, hypocritical, eavesdropping, jealous, infinitely cruel and unscrupulous dressed in a mackintosh coat, on the landing; love and religion. Had she ever tried to convert any one herself? Did she not wish everybody merely to be themselves? (138)

愛と宗教を残酷だとするダロウェイ夫人は「すべての人がその人らしくあることを願っている」。このダロウェイ夫人が嫌悪する押し付けを強制し、自分らしく生きることを諦めさせようとする人物がセプティマスの二人の医師、ホームズと Sir William's である。

Conversion is her name and she feasts on the wills of the weakly, loving to impress, to impose, adoring her own features stamped on the face of the populace. At Hyde Park Corner on a tub she stands

preaching; shrouds herself in white and walks penitentially disguised as brotherly love through factories and parliaments; offers help, but desires power; smites out of her way roughly the dissentient, or dissatisfied; bestows her blessing on those who, looking upward, catch submissively from her eyes the light of their own. This lady too (Rezia Warren Smith divined it) had her dwelling in Sir William's heart, though concealed, as she mostly is, under some plausible disguise; some venerable name; love, duty, self-sacrifice. (109-110)

「その女神は名を改宗といい、柔弱な人間の意志を食らって生き、おのれの意見を刻印し押し付けることを愛し、大衆の顔に刻まれたおのれの容貌を自らあがめる。ハイド・パーク・コーナーでは樽に立って演説をぶつ。あるいは兄弟愛のまっ白な仮装をまとい、悔悟者のごとくに工場と議会のあいだを練り歩き、援助を申し出、そのじつ権力を願い、意見を異にしたり不平をいう人々を手荒に打ちのめしておのれの通り道から排除する一方で、彼女を仰ぎ見ながらその目から光を得ようとする従順な者たちには祝福を投げ与える。この女神もまた（レイツィア・ウォレン・スミスが見抜いたように）サー・ウィリアムの心の中に住みついていた - たいていの場合そうなのだが、彼の場合にも何かもっともらしい仮装の下に身を隠し、愛とか義務とか自己犠牲といったなにかご立派な名前を名のってはいたのだが」。

つまりセプティマスは改宗の強要者である医師に抵抗するために自殺を選び、ダロウェイ夫人はまるでセプティマスに同化したかのように、医師が「魂を無理矢理支配する」という侮辱を加え、人生を耐えがたいものにすると考ええる。セプティマスに一面識もないダロウェイ夫人だが「自分が彼に似ている気がする」と感じ、「彼が生命を投げ出したことを嬉しく思う」（204）。セプティマスの自殺は改宗から逃れる道で、彼にとって宗教や医学は救いではない。

グリーンはカトリック信者である。『事件の核心』の最後は、自殺したスコビーについて、Father Rank と妻であったルイーズの「彼（スコビー）

は神を愛していた」そして「彼は神以外を愛していなかった」と言う会話で終わる。カトリック信者が犯し得る最悪の罪である自殺を通してグリーンは神の絶対的な愛を描いた。拙論「グレアム・グリーンが描く逆説的な神の愛」では、スコビーの絶望に焦点を当て、その絶望がキリスト教理により神の恵みに転換される過程を考察した。『事件の核心』が発刊されて以来、スコビーの類を見ない‘pity’と‘responsibility’の感覚は長い間、研究者の批判の的だった (Stratford, Sharrock, Rao, Snyder)。しかしながら、それと同時にスコビーの罪をキリスト教の見地から擁護する論も多い (Scott, Erdinast-Vulcan, Couto, Barrett)。さらに Allain は、神の恩寵についてグリーンが発言: “I can’t bring myself to imagine that a creature by Him (God) can be so evil as to merit eternal punishment. His grace must intervene at some point.” (150) を記している。グリーンは神理解を尊重し、神の恵みは介入することをスコビーの罪、絶望を通して明らかにせんと試みた。

セプティマスもスコビーも最終的に両方が自死を選んだが、その自殺から垣間見える作者の信条は大きく異なる。「わたしの経験から言えば、宗教にかぶれると（或いは何かの大義にかぶれると）心は無感覚になっていく。感情は鈍くなる」(12) というダロウェイ夫人のことばには、ウルフの人生観が強く滲む。セプティマスは改宗されることを拒み、改宗から逃れる術が自殺だった。ウルフ自身も自殺を選んだが、同じ理由だったのかもしれない。スコビーは人への愛ゆえに、神の国を離れ去ることになったが、逆説的に真の神へ立ち帰ることになった。Erdianst-Vulcan は “Scobie’s spiritual autonomy turns him into an exile, and paradoxically leads him back to the truest Christian ideal of altruistic love in defiance of the official dogma of its church.” (53) と主張する。神は自らの罪に絶望する者を引き上げ、自分を低くする者を高くされる。グリーンは神への信頼が読み取れる。

5. おわりに

『ダロウェイ夫人』のセプティマスは、第一次世界大戦から復員後、精神

を病み、自殺願望がある。彼は木々や葉とつながっている感覚を持つ一方、「何も感じられない」自分や邪悪な世界に絶望を感じている。セプティマスにとって、この世界と死後の世界はつながっており、しばしば死んだはずのエヴァンスの気配を感じる。ダロウェイ夫人は超越的理論をもち、無神論者である彼女の宗教に代わる思想となっている。ダロウェイ夫人は「魂を無理矢理支配する」医師に立ち向かい、セプティマスが自死を選んだことを聞き、嬉しく思う。自殺はセプティマスにとっても正義だった。ダロウェイ夫人は「愛と宗教は魂の独立を破壊する」と断じている。

『事件の核心』のスコビーはカトリック教徒で、真面目に坦々と生きていた。しかし、妻への責任感から思いがけない方向へ運命は転がり落ちていく。スコビーは思ってもみなかった罪を重ねていき、最終的にカトリック教徒が犯し得る最悪の罪である自殺に至る。スコビーは自らの罪を自覚し、地獄に墮ちることを信じ、深い絶望の中にいる。その絶望こそが神の恵で、スコビーは多くの絶望ゆえに神の愛を知るに至った。

引用文献

- Allain, Marie-Francoise. *The Other Man: Conversations with Graham Greene*. The Bodley Head, 1983.
- Barrett, Dorothea. "Graham Greene." *The Cambridge Companion to English Novelists*, edited by Poole, Adrian, Cambridge University Press, 2010, pp. 423-437.
- Couto, Maria. *Graham Greene: On the Frontier*. St. Martin's, 1988.
- Erdinast-Vulcan, Daphna. *Graham Greene's Childless Fathers*. St. Martin's, 1988.
- Greene, Graham. *The Heart of the Matter*. Penguin Books, 1948.
- Office for National Statistics. "Suicides in England and Wales: 2020 Registrations" <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/birthsdeathsandmarriages/deaths/bulletins/suicidesintheunitedkingdom/2020registrations>
- Rao, V. V. B. Rama. *Graham Greene's Comic Vision*. Stosius Inc, 1990.
- Scott, JR. Nathan A. "Graham Greene: "Christian Tradition."" *Graham Greene: Some Critical Considerations*, edited by Evans, Robert O, University Press of Kentucky, 2009, pp. 29-48.
- Sharrock, Roger. *Saints, Sinners, and Comedians*. University of Notre Dame Press, 1984.
- Sinclair, Peter M. "Graham Greene and Christian Despair: Tragic Aesthetics in

- Brighton Rock and The Heart of the Matter.” *Renascence: Essays on Values in Literature* 63.2, 2011, pp. 130-46.
- Snyder, Robert Lance. ““What or Who is King Kong?”: Graham Greene’s the Captain and the Enemy.” *Renascence*, 65 (2) , 2013, pp. 125-139.
- Stratford, Philip. *Faith and Fiction: Creative Process in Greene and Mauriac*. University of Notre Dame Press, 1964.
- Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf, Volume 1& 3: 1915-1919*. Mariner Books, 1979.
- . *Mrs Dalloway*. Penguin Books, 1925.
- Zwerdling, Alex. *Virginia Woolf and the Real World*. University of California Press, 1986.
- 厚生労働省. 「自殺の現状」 <https://www.mhlw.go.jp/content/r2g-1-1.pdf>
- 島居佳江. 「グレアム・グリーンが描く逆説的な神の愛」日本比較文化学会比較文化研究九州支部 150号, 2023, pp. 55-63.
- 『聖書 新改訳』日本聖書刊行会, 1973.

